元頂相の傳統に據るもの乍ら、その描法に於ては又自づから新たなるものあることが觀取せられる。先づその面貌の描寫を見るに、輪廓は殆ど肥瘦なき清勁なる淡墨の細線に依つて象り、暈彩を用ひることなくその淡墨線上を撫するに淡朱の細線を以てし、僅かに肉身の感覺を盛る。眉は焦墨の毛描き鋭く、眼は二重瞼に淡き胡粉を引き、上瞼に焦墨を用ひて睫毛を描き、白目には胡粉、黑目は褐色に塗り周邊より焦墨にて暈し、漆黑の瞳を點じて藏むる機鋒の鋭さを現す。唇は朱色を暈し、引結ぶ口唇を劃する濃墨の一線は又苦修の更歷を偲ばしむるに足る。畫趣簡淨よく和尙の風神を傳へたるものと云ひ得るであらうが、茲に此面貌の描寫に於て注目すべきは、宋元舶載乃至我邦初期の頂相に於て著しかりし隈取の消滅せる點であつて、此事たる肉身に朱線を添えることゝ共に、以て頂相描法の和化を徵すべく、漸く迫眞の力に乏しとは云へ、しかも却つて茲に禪僧の寫貌に簡率なる一畫境を拓ける如き感すら覺えしめるのである。

衣文は暢達せる濃墨線に成り、趺座せる肉體を裹んで流石に堅實である。衣は無地の淡褐色、僅かに淡墨の隈がある。袈裟は田相に綠褐地金泥文、緣に無地の藍色を設す。法被は鮮麗なる朱地に白綠と白群の牡丹唐草の文樣を置き、襴は綠靑地に胡粉線を以て壽字くづしを劃する。曲彔は濃墨。踏床側面同色、上面は白綠地、緣群靑地、靴は表橙色、裏胡粉を以て彩色する。かくて今、此賦彩の法を概觀するに、かの法衣の淡雅簡淨なるは法被の富贍妍麗なると兩々相對し、互ひに相强調するところある中に、獨り曲彔の力强い黑き線は靜かに兩者を支配して畫面を落付きあるものたらしめてゐるのが注目せられる。

要之、本像は保存比較的完好、我邦頂相中の一優作たるのみならず、更に年紀の徵すべきものあるによつて史上一段の重要性を加ふるものと云ふことが出來る。

尙因みに云へば雲巖寺所藏佛應禪師像（本誌第四十一號所載）は畫趣酷だ本圖に近似し、佛應歿後三十六年貞治二年大喜法忻の着贊するとは云へ、しかも猶兩者同筆に非るやの疑問を拂拭し得ない底のものである。附記して後考を俟つ。（梅津）

四二

五、六　抱一筆　風雨草花圖

東京　伯爵　德川宗敬氏藏

紙本銀地著色　二曲屏一雙　各隻　竪一・五六米（五尺四寸四分五厘）　横一・八二米（六尺五厘）

本誌第二十五號に揭げた光琳筆風雷神圖の裏に繪かれた有名な一圖である。もとより作の如何に拘らず裏繪は卽ち裏繪であつて表と相離して觀るべきものではないが、併し裏繪としての意匠を窺ふ事も亦自ら表を觀るとは別途の一事にも相違なく、以て抱一その人の手腕を知るべき資料として茲に載せる。

更めて云ふまでもなく光琳は建仁寺の宗達畫を寫してこの一雙の表を繪いた。抱一も之に倣うて一屏を作ると共に、重ねてこの原圖の裏に一意匠を試たのである。もと屏風の表裏に繪を裝したものは間々存するが、裏は殊に色彩の輕淡なるものゝ多きは保存の爲よりしても當然とすべき所で、かゝる華麗な賦彩を施した例は甚だ稀である。是が爲に私は一たび之を、裏を裏のみとして、或は表裏何れか一隻宛を對比せしめて觀賞し得る如くに意匠したものかと考へても見たが、この二隻の構圖に連絡乏しきものがあるのみならず、尠くも現在の裝法に於ては裏面に折返し得ない狀態になつてゐて、遍に表の光琳畫に附して之を飾つたものと信ずるの外はない。技を凝すことの深きは卽ちその表を重んずる事の大なるが故であらう。

その構想は表の金に對する銀地、上天の二神に對する地上の草花を以てしたもの、雷神の裏を飾つたのは驟雨に打たるゝ夏草で、嵩を增した野水の邊に雨脚の重みに項垂れつゝ搖ぐ萱、晝顏、百合、雁皮、愼しき女郎花が却つて目立ち、風神の裏は疾風に動く秋の叢で、一陣の野分に葛の蔓の空ざまに伸び、錦繡を飾つた蔦の葉が之を追ふて上る一瞬、地を匐ふ藤袴、葉音高き薄が一樣のどよめきを見せて、秋色は正に絢爛としてゐる。天地を對比した落想に加へてこの瀟洒たる圖の構へは洵に抱一一流の壇場であらう。

のみならず筆は努めて謹厚である。夏隻の萱、晝顏の葉、秋隻の薄、葛の葉

に浮ぶ。之等は凡て沒骨風の厚彩色で之に水、葉脈等の泥描を加へ、僅かに雁皮、藤袴の葉のあたりに墨地に綠褐等をたらし込んだ輕調を見せてゐる。恐らくかゝる手厚い畫法は抱一の作中にも尠しとすべく、玆にも彼の師に對する敬意の一端があるのであらう。

なほその作期に關しては第二十五號の解說にも既に說かれた如く、彼が表の光琳畫を寫したと同時であらうが、この風雷神が光琳百圖後篇の最後に收められてゐることからすれば、恐らく文化十二年の跋ある百圖前篇出板以後、後篇の成つた文政九年迄の事かと思はれる。（渡邊）

七　如意輪觀音像

奈良　法隆寺藏

木造　高蓮座共二一糎（六寸九分）

（荻野三七彥「法隆寺の聖皇曼荼羅」參照）

等の綠青と白綠とが畫調の平明を作る間に、前者には紺青の水、淡紅の畫顏花、百合の白、雁皮の橙、女郎花の黃を配し、後者は一段と色を增して、燃える蔦は更にも、その葉間の碧綠の實、葛花の白紅、藤袴の薄紫、尾花の淡褐が鮮か

書評

戰國式銅器の研究

東方文化學院京都研究所　研究報告第七册

梅原末治

一九二三年支那山西省大同府に近い渾源州の李峪村に於て發見せられた一群の古銅器は佛蘭西巴里の美術商ワニエック氏の手を經て、秦銅器の稱呼のもとに新奇なるものとして西歐支那古美術蒐集家の間に行き互り、チザック氏の著書これを錄するに至つて東洋學者の注意と興味が惹かれることになつた。しかしてこれを機緣に從來閑却せられた類品世に出で又研究方面にシレン博士、サルモニー博士等のこれに關係ある著錄の頻出を見支那古銅器研究は新生面を開展する形勢に至つた。

この歐洲諸國に於て秦銅器觀賞の盛なる時彼地に赴かれた著者は諸家蒐藏の遺品を廣く通觀じ、精査の結果、これが秦代作品となすことの當らざるを究められ、歸朝後も東方文化學院京都研究所に於て尙資料の蒐集、支那に於ける考古學上の發見に留意し如上の見解の修築に志念され、こゝに李峪村發見品を中心とする報告を公にされたのである。